

2025年度 大学入学共通テスト 「歴史総合, 日本史探究」の分析

日本史

学校法人 河合塾 日本史講師 中垣 秀作

1 はじめに

共通テストになって5年目の、そして何より新課程元年の入試を迎え、新科目「歴史総合, 日本史探究」が登場した。共通テストとしては、これまでの傾向が一層強まり、高校生の主体的な学びを踏まえた場面設定がついに全大問となり、そのうち会話形式は大問3問と半数を維持した。また、何らかの形で思考力・判断力を問う設問は、私見ではついに9割を超えた(表)。

表 「歴史総合, 日本史探究」の問題分析

	A	B	C
2018 試行調査	9	9	18
2020 センター試験	34	0	2
2021 共通第1日程	19	3	10
2022 共通本試験	12	0	20
2023 共通本試験	6	0	26
2024 共通本試験	11	0	21
2025 共通本試験(新課程)	2	1	30

A: 知識・技能を問う設問

B: 思考力・判断力を問う設問

C: AとBの両方の要素を問う設問

以下、具体的に本試験の分析を試みる。

2 分量・構成・出題形式

分量は昨年度より1問増えてマーク数33になった。そのうち、第1問の「歴史総合」は試作問題より1問減って8問、第2問～第6問の「日本史探究」が25問であった。時代構成は「歴史総合」も含めて前近代と近現代の割合がほぼ6:4で、昨年度までの「日本史B」と同様であった。出題形式は、文章正誤問題が最も多く、全体の5割を占めた。ついで短文と語句などの組み合わせ問題が2割、空欄補充問題が1割強、年代配列問題・その他が各約1割と続いた。一般に空欄補充問題といえば、歴史用語を問うものと思われがちだが、共通テストでは少し異なる。例えば2025年度は、会話の展開を受けて空欄に短文を入れさせる問題が出題された(4・22)。昨年度までにも、表の読み取り内容を空欄にするなどの工夫が見られ、空欄補充問題で思考力・判断力を問おうとする姿勢が見られるのである。

3 共通テストの特徴的傾向

ここでは、本試験で見られた特徴的傾向を、河合塾「共通テストリサーチ」のデータをもとに具体的に見ていく。

(1) 注目の「歴史総合」の出題

●例題1 2025年度共通テスト本試験: 第1問問1 1

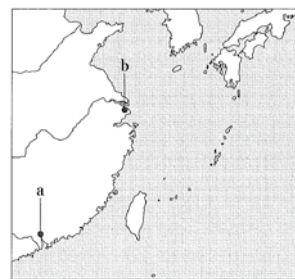
問1 下線部③(編集部注: 主権国家からなる国際秩序)について述べた文あ・いと、後の図に示された、18世紀末にイギリス人が自国船での利用を公認されていた港の場所a・bについて、最も適当なものの組合せを、後の①～④のうちから一つ選べ。 1

下線部③について述べた文

あ 朝貢と冊封によって結びつけられた秩序。

い 諸国家が、外部の干渉を受けずに、国境内の統治権を認め合う秩序。

- ① あ—a ② あ—b
③ い—a ④ い—b



●例題2 2025年度共通テスト本試験: 第1問問7 7

問7 松田さんは20世紀後半の時期に着目して、アメリカ合衆国を含む西側諸国とほかの地域との間の、人やモノの流れに影響を与えた出来事を調べ、メモにまとめた。メモⅠ～Ⅲに書かれている出来事について、古いものから年代順に正しく配列したものを、後の①～⑥のうちから一つ選べ。 7

メモⅠ

チェコスロヴァキアでは、民主化を求める動きがワルシャワ条約機構軍の介入により挫折した。このことが、西側諸国への亡命者が増えるきっかけとなった。

メモⅡ

鄧小平が、「四つの現代化」を国家の基本方針として決定した。このことが、アメリカ合衆国への留学や、企業の相互進出のきっかけとなった。

メモⅢ

カストロが、社会主義政権を樹立した。このことが、アメリカ合衆国に難民が流出するきっかけとなった。

- ① メモⅠ—メモⅡ—メモⅢ ② メモⅠ—メモⅢ—メモⅡ
③ メモⅡ—メモⅠ—メモⅢ ④ メモⅡ—メモⅢ—メモⅠ
⑤ メモⅢ—メモⅠ—メモⅡ ⑥ メモⅢ—メモⅡ—メモⅠ

注目の新科目「歴史総合」であるが、2025年度本試験では8問出題され、平均正答率は約58%であった。また、試作問題では日本史教科書には記載がない世界

史の知識が必要な問題はほとんどなかったが、2025 年度本試験では「日本史探究」の教科書には**ほぼ記載がない世界史の知識が必要な問題が、複数出題された。**例題 1 は、パネルと地図を利用している点で共通テストらしい問題といえ、かつ世界史の知識が必要ともいえることから取り上げた。正解は③だが、正答率は約 33%と低く、誤答は②・④が多かった（ともに約 28%）。これは 18 世紀末にイギリス人が自国船での利用を公認されていた港の場所が判断できなかった受験生が多数いたことを示している。ちまたでは、b の上海がアヘン戦争の結果、南京条約で開かれた港であり、それは多くの「日本史探究」の教科書にも載っている知識だから消去が可能との指摘もあるようだが、現実にはそうした判断ができた受験生は少なかったといえる。世界史の知識があれば a の広州を選べるので、その意味で世界史の知識が必要な問題といってもよいのではと思う。例題 2 は、多くの受験生が苦手とする年代配列問題であり、かつ世界史の知識が必要な問題であることから取り上げた。正解は⑤だが、正答率は約 39%と低かった。誤答は②に集中しており（約 33%）、これはメモ I の時期判断を間違えたことを示している。本問のような「日本史探究」の要素が全くない問題が来年度以降も続くかどうかは不明であるが、もし続くとなると「歴史総合」への向き合い方も変わってくる可能性があるといえる。

(2) 多様な資料(史料・図版・統計表など)の利用

●例題 3 2025 年度共通テスト本試験：第 3 問 問 3 16

問 3 下線部㉔に関連して、渤海を「高麗」と記す資料があることに関心を持った二人は、「高麗」という記述がある資料を集めた。資料 1～4 のうち、渤海のことを「高麗」と記す資料として最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。 16

資料 1

天皇が右大臣に大宰府の文書と高麗国の外交文書を示した。公卿たちが議論した結果は、「返事をしてはならない。また、要害を警固し、祈禱を行う。」ということだ。ただしこの外交文書は高麗のものではないようだ。もしかすると宋の謀略か。

資料 2

高麗の使者の外交文書には、「高麗国王の大欽茂が申し上げます。日本では聖武天皇が亡くなったとお聞きしました。そこで使者を遣わして、上表文と恒例の貢物を持たせて入朝させます。」とあった。

資料 3

高麗の使者は、「隋の煬帝は、三十万の軍を送ってわが国を攻めましたが、逆にわが軍によって破られました。その時の捕虜や武器、国の産物などをたてまつります。」と述べた。

資料 4

難波薬師奈良らは、「私たちの先祖である徳来はもと高麗人でしたが、百済国の人となりました。昔、雄略天皇が百済に技術者を求めた際、徳来を日本におくりました。」と述べた。

① 資料 1 ② 資料 2 ③ 資料 3 ④ 資料 4

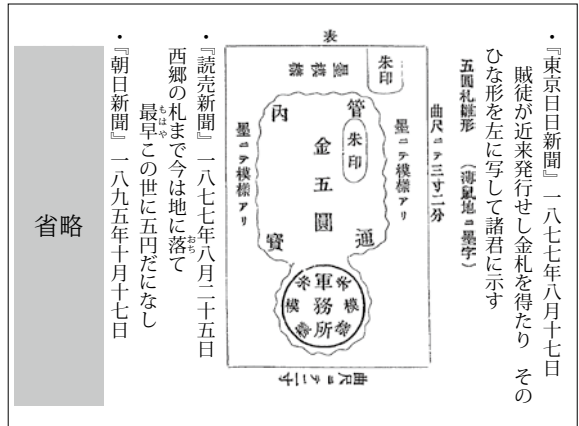
●例題 4 2025 年度共通テスト本試験：第 6 問 問 1 29

問 1 ナツさんは下線部㉔の小説を読んでその概要をメモにまとめたとともに、その素材となった西郷札についてデータベースから関連する新聞記事を探し、資料 1 としてまとめた。メモも参考にしながら、資料 1 から読み取れる内容あ・いと、西南戦争開戦と同時期の政府の政策 X・Y とについて、最も適当なものの組合せを、後の①～④のうちから一つ選べ。 29

メモ

「西郷札」は、西南戦争の時に発行された軍費調達用の金札を政府に補償させようとして、1877 年 9 月の戦争終結後に買い占めに走った男が破滅に至るまでを描いた歴史小説である。

資料 1



資料 1 から読み取れる内容

- あ 西郷札と称する金札は、西郷隆盛の命運とともに価値がなくなった。
い 西郷札と称する金札を、植民地の朝鮮で交換しようとした者がいた。

西南戦争開戦と同時期の政府の政策

- X 政府は、地租改正反対一揆をうけて、地租の税率を引き下げた。
Y 政府は、兌換紙幣を発行し、銀本位制を確立した。

① あ—X ② あ—Y ③ い—X ④ い—Y

共通テストでは、史料・図版・地図・統計表・グラフなどの資料を利用した設問が実に多く出題されている。例題 3 は、4 本の資料のうち、渤海のことを「高麗」と記す資料を選ばせるという、一見、ややこしい設定の問題であり、新傾向の問題でもあることから取り上げた。正解は②で、正答率は約 47%とやや低めだった。誤答は①がやや多いものの分散しており、設問の意図が把握できなかった受験生も少なからずいたであろうことが推測される。本問は判断力と知識を駆使して、渤海が存在した時代の資料を選べばよいことに気付ければ難しくはないのだが、そうした判断ができた受験生は半分弱

にとどまったということである。例題4は、メモの情報と関連する新聞記事(資料1)を利用した問題で、共通テストらしい問題であることから取り上げた。正解は①で、正答率は約38%と低かった。誤答は③が多く(約30%)、資料1から読み取れる内容としていを正文と判断した受験生が少なくなかったことを示している。いは資料1の左から4行目に「1895年」とあるので、左から1行目の「総督府」は台湾総督府であろうと推測できなければいけない。1895年の段階では「朝鮮」はまだ植民地ではないことは基本事項だと思うのだが、資料1の中にあると見逃してしまうということであろうか。

(3) できごとの因果関係や歴史的意義を問う

●例題5 2025年度共通テスト本試験：第4問問4 [22]

B

(中略)

翔太：戦国大名の鉱山開発を手がかりにすると、戦国時代以降に活発化した鉱山開発は、日本社会にどのような影響をもたらしたのだろうか、という問いが立てられそうだね。

陽菜：鉱山開発が活発化した結果、統一権力がみずから貨幣を製造するようになり、近世においてさらに貨幣経済が進展したのではないか、という仮説が立てられるかな。

翔太：でも、⑥鉱山が開発されたというだけでは、貨幣を製造する理由にはならないよね。[ウ]という前提があったことも重要だね。

問4 下線部⑥を踏まえて、空欄[ウ]に入る文として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 [22]

- ① 貨幣不足を解消するために、戦国大名が領内のみに通用する藩札を発行していた
- ② 品質の悪い銅銭が増加し、商取引の際に銭の選別が行われていた
- ③ 税や軍役の賦課基準として、土地の生産力を銭で表すようになった
- ④ 対外貿易が活発に行われ、日本産の銀が大量に流出していた

例題5は、2で先述した空欄補充形式で思考力・判断力を問おうという問題、かつ会話をしっかりと読んで、因果関係を考えなくてはいけない問題ということで取り上げた。正解は②だが、正答率は約35%と低かった。誤答は分散しており、受験生には相当悩ましく見えた問題といえる。空欄[ウ]に入る文を選ぶわけだが、その前後の記述に着目すると、空欄[ウ]の直前には戦国時代に「鉱山が開発されたというだけでは、貨幣を製造する理由にはならないよね」とあり、空欄[ウ]の直後には、「という前提があった」とあるので、一つ前の陽菜さんの発言も踏まえれば、近世において貨幣を製造する理由になりそうな中世についての文が入ると推測できる。その上で選択肢を吟味すれば、②が最もフィットするというわけだが、なかなかそのような判断には至らなかったようである。

4 対策と展望

▶資料問題の演習量の確保

新課程でも予想通り、「歴史総合」・「日本史探究」ともに多様な資料(史料・図版・地図・統計表・グラフ)を利用した問題が出題された。対策としては、とにかく「慣れる」ことが重要なので、そのために共通テストの過去問などで演習量を確保したい。また、『図説日本史通覧』の「巻頭特集」(巻頭3～20)は多様な資料の読解の方法などを「絵画資料」、「絵図資料」、「文字資料」などと分けて丁寧に解説しており、指導の際に有用である。

▶「知識」を強化する必要

例題としては取り上げなかったが、2025年度本試験で最も正答率が低かったのは、主に知識を問う第6問問4([32]：正答率約27%)であった。また、全統共通テスト模試などのデータからも知識型の問題の正答率が低い傾向にあることが分かっている。過去の共通テスト「日本史B」でも知識型の問題は一定程度は出題されており、何より思考力・判断力養成の前提としても知識を身につける必要がある。形式・内容面でも旧センター試験と同じような設問も出題されているので、過去問なども大いに利用して、知識面の強化を図りたい。

▶「歴史総合」について

昨年度のこのコーナーで危惧したことが現実化した。簡潔に言えば、試作問題とは異なる傾向(例えば、世界史分野の知識も必要な問題)で出題される可能性を指摘したのだが、案の定、2025年度本試験では複数の世界史の知識が必要な問題が出題された([1]・[3]・[7])。点数にすれば10点弱なので、負担の重さを見ると、高得点が必要なければスルーする手もあると思うが、どうしても高得点が必要ならば、それなりの時間と労力を「歴史総合」に割くことになるであろう。指導者も受験生も難しい判断を迫られる場面が出てくることになる。ただ、いずれにしても実戦力の養成には、問題演習が欠かせない。過去問が1年分しかない科目なので、共通テスト「日本史A」および「世界史A」の近現代史部分の過去問演習などにも積極的に取り組ませるなどして、演習量の確保を図ることが肝要と思われる。また、「歴史総合」の理解力強化という点では、『明解歴史総合図説シンフォニア』の「巻頭」や「世界全図と東アジア全図で見る歴史」、通史ページの随所にある「ヒストリーツアーズ」や「世界の中の日本」などのコラムも学習に有用である。